

所属： 危機管理学部 危機管理学科

資格： 専任講師

氏名： 工藤 由布子

<p>研究課題名</p>	<p>19世紀の英国の小説家、エミリ・ブロンテの作品（詩と小説）の研究</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>エミリ・ブロンテの作品は、非常に感情豊かに描かれており、ともすると狂氣的とも言える感情の振幅がある。特に、『嵐が丘』の主人公であるヒースクリフには、その歓喜と苦悩を「同時に」感じる描写が数多くあり、その剥き出しな感情は人間としての原始的なものを読者の心に訴える。この研究は、エミリの作品に描かれるその両極的な人間感情を、天国と地獄、天使と悪魔、飛翔と沈潜など、様々な表現で描写する幾つかの文学作品と比較しながら、その特徴をまとめていくものである。</p> <p>エミリの作品では、人間感情の両極性の共存や混交が、「自我」をもたらす。その「自我」は、神や悪魔のできないことをするキャサリンの「意思」、また天国と地獄を凌駕する人の「意思」として、『嵐が丘』や「哲学者」で描かれる。このようなエミリの両極性の描かれ方を、他の作家の作品と比較し、共通点や異なる点を挙げながら、エミリの特徴を考察する。比較対象として、英国のロマン派の詩人バイロンの作品と、エミリと同様に処女作からバイロンの影響を受けた日本の北村透谷の作品を取り上げる。この両者を、言語に囚われずに「描写方法」に限って分析し、バイロンをどのように受容し作品に昇華したのかを考察する。透谷は、評論「外界に対する観念」や詩「蓬莱曲」で「二元性」について論じており、文学者の太田三郎は「『蓬莱曲』と『マンフレッド』の比較研究」で、バイロンも透谷も「自我を徹底的に追究せんとした人間」だと評価している。また、透谷の小説「我牢獄」では、「天使」と「獄吏」を明確に識別できない主人公が描かれるので、面白い参考資料となるだろう。</p>
<p>研究実績の概要</p> <p>研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等</p>	<p>エミリ・ブロンテを、二元論の観点で、バイロンと北村透谷と比較する研究をしてきたが、「エミリ・ブロンテの両極的な表現～バイロンと北村透谷の比較から～」という口頭発表を行った際に、この3者の比較が三つ巴となっている上に、宗教的な問題を蔑ろにしていないかという問題を突き付けられ、この三者について少し整理が必要となってきた。ブロンテの作品をバイロンのそれと比較することについては、類似点が非常に多くこれまでの研究が示す通り比較対象として問題無いように思われるが、ブロンテを北村透谷と比較することについては、こちらもこれまでの研究が示す通り、確かに透谷の作品とバイロンのそれとの類似点は多いものの、ブロンテとの比較はやや飛躍があると思われる。一方で、この3者の比較の結果、両極的な表現の中心に、ブロンテが必死になって守ろうとしていた「心」が密かに在ることが分かり、これは大きな収穫であったと言えるだろう。今後は、この「心」に重きを置きながら、ブロンテが詩や小説を通して、如何にして辛い時期を乗り越え、自身の心の安寧を得たか研究を進めていきたい。その際には、ブロンテの伝記等を通して可能な限り私生活についても調べ、精神的な危機についてまとめていくことになるかと思う。</p>